

訳あり悪役令嬢は、
婚約破棄後の人生を自由に生きる

クロード

アレンプラール王国の第二王子。
チャラくていい加減な雰囲気とは裏腹に、
実は真面目な性格。
国を守り立ていくため、
レティシアに協力を依頼する。

アンナ

ディオンが見初めた
清純な少女。何か秘密が
あるらしく……

ディオン

アレンプラール王国の
第一王子。婚約者だった
レティシアに婚約破棄を
言い渡した。

モンタンベール

アレンプラール国王の甥で
公爵位を持つ。野心家。

クリストフ

王都で騎士団長を務めていた
実力者。その職を辞して
レティシアの護衛になる。

シュザンヌ

シャリエール公爵家の完璧な侍女。
すぐにぐーたらしようとする
レティシアに手を焼いている。

レティシア

シャリエール公爵家の令嬢として
転生した元看護師。
おいしいお酒とご飯、そしてぐーたら生活を
こよなく愛しているが、
なかなかのんびりできなくて……

登場人物紹介

プロローグ

目をつぶつてもなお感じるほどの強い光。ここ——王城の大広間は、眩い光が溢れ、輝いていた。広間の中央は、軽やかな音楽に合わせて紳士淑女達がダンスを踊る場。

そして、広間のあちこちに置かれたテーブルの上には、色とりどりの料理や飲み物が並んでいた。それらすべてに手間と贅が尽くされている。

今日は貴族院の卒業パーティー。貴族の子女が二年間教育を受ける貴族院は、この国の貴族に必要な知識と振る舞い、魔法の基礎を学ぶ場である。そして、貴族院を卒業すると、みんなはそれぞれの道へとその身を投じていく。

私——レティシア・シャリエールも貴族院の卒業生としてパーティーに出席している。本来であれば、素敵な殿方とダンスをし、友人達と語らうはずだった。

けれど、私にはそのどちらも叶わない。

華やかなパーティー会場の素敵な雰囲気の水を差しているのは、他でもない私。

私はシャリエール公爵家の令嬢で、この国の貴族の中では高い身分を持つ。

今日の装いも、公爵令嬢にふさわしい華やかなものだ。高級な美しい布を使って、一流の職人に

しか作れない、技巧を凝らしたドレスを身にまとっている。金色の髪はいつもより艶が増し、光り輝いている。

けれど、むしろその姿は滑稽だ。貴族院の卒業生である私の醜態を、浮き上がらせるための舞台装置にしか思えない。

今、目の前には私の婚約者がこちらを睨みつけ、立っている。

そして周囲の人々は皆、息を呑んで私達の様子をうかがっていた。

先ほど婚約者が私に向けた一言が、このパーティー会場を静まり返らせたのだ。

「レティシア・シャリエール。俺がなぜこんなことを言うか、わかるか？ 君は、俺の信頼を踏みじりに、シャリエール公爵家の名を汚した。その罪は許されるものではない」

私の婚約者、ディオ・アレンフラルはそう言った。

彼はアレンフラル王国における王位継承権第一位の王子だ。

精悍な顔つきの彼は、怒りに満ち溢れた表情を浮かべている。

父である国王譲りの金色の髪は、彼が怒りに震えているせいで揺らめいていた。迫力満点である。けれど私は、ここで引き下がる訳にはいかない。できるだけ自信ありげに、胸を張って答えた。

「あら？ なんのことをおっしゃっているのかしら？ 私にはまったく見当が付きませんわ」

「白々しい。そうやってしらを切るのもここまでだ。君が彼女——アンナ・マケール嬢に何をしたか、覚えてないとは言わせない」

彼はそう言いながら、自身の背後をちらりと見る。そこには、可愛らしい令嬢アンナ様が立って

いた。

大きな瞳、小さな唇。色素の薄い髪も、透き通るような肌も美しい。抱きしめたら折れてしまいそうな華奢な体躯は、男性の庇護欲をくすぐるに違いない。

そんな彼女は、瞳をうるませながら、殿下の上着の裾をそとつまんでいる。

「君が今まで彼女にした嫌がらせについて、すべて聞いた。証人もいる。言い逃れはできまい」

「そうです……私の言うことよりも、その女を信じるというのですね」

私は、やや大げさなため息をつき、どこか馬鹿にするように薄い笑みを浮かべた。その仕草が癪にさわったのだろう、ディオ・殿下は声を荒らげた。

「くっ——、彼女の言葉が嘘だと言いたいのか!? どの口が言うのだ！ 俺は君を信じていた！ けれど、貴族院に入学してから二年で、君はすっかり変わってしまったじゃないか！ 裏切ったのは君だ！」

大広間の中央で向かい合う——いや、睨み合う私と殿下。

誰が見ても一触即発の事態。だが、これは私が望んだことだった。私の目論見がようやく叶う。もうすこしで終わりね。

そう思いつつ、人をあざけるような表情を作る。そして、殿下とアンナ様を冷めた目で見ながら扇を顔の前で開いた。

「そうまでしてその女のことを——」

必死に視線に憎しみを込めた。



偽りの憎しみだが、公爵令嬢である私が醸し出す険悪な空気に、周囲の人々は青ざめる。

「もういいですわ……すべて殿下の言う通りです。私はその女に嫌がらせをしていました。それで？ それがなんだというのです？」

私の言葉にディオン殿下が眉をひそめる。

「――何？」

「男爵家の令嬢ごとき、どう扱っても構わないではないか、と言ったのです。所詮は有象無象。公爵家の令嬢である私とは住む世界が違うのですよ」

「そ、それは本気で言っているのか？」

「本気も何も、事実ではありませんか。殿下に群らがる虫を追い払った。ただ、それだけのことでございます」

そう言って私は笑う。

愉快そうに、楽しそうに。そんな表情とはまったく逆の思いを抱いているせいで、心は今にも張り裂けそうだけれど。

「ふざけるな！ そのようなこと！ 見損なったぞ、レティシア！」

殿下は、顔を真っ赤にして私に詰め寄ってくる。今にも殴りかかってきそうなほどの剣幕に、思わず体を縮こませた。

「君との婚約は破棄する！ そのようなことを平気でぬかす者と結婚するなど、虫唾が走る！ 二度と、俺の前にその姿を見せないでくれ！」

彼の叫び声は大広間中に響きわたった。

この場に来ていた貴族達全員が、この宣言を聞いたことだろう。殿下はアンナ様の手を取ると、さっさと大広間を出て行った。

……これで、私が二年間こつこつと頑張ってきたことが、実を結ぶ。

きっとこの国は、まだ命をつなぐことができるだろう。そのために、私は殿下との婚約を破棄したかったのだ。

これが私の貴族としての役目。頑張つてよかったのよ。

そう自分に言い聞かせるものの、私の頬にはいつのまにか涙が伝っていた。その涙を止める術を私は持たなかった。

こんな姿を人々に見られたくなくて、私はバルコニーに出た。

私と殿下が会場を去ったからか、音楽が再び聞こえてくる。ざわめく声も徐々に響きはじめる。

このままダンスの時間が過ぎれば、あとは国王陛下から祝いの言葉をもらい、卒業パーティーは終わりだ。

その時、この国の宰相であるお父様と顔を合わせることになる。気まずいことこの上ない。きっと、さっきの話はすぐにお父様の耳に入るだろう。

暗い気分で夜風に当たると、しばらくすると、音楽が途切れた。そろそろパーティーはお開きだ。行きたくないな。

心の中で呟き、私はそつと大広間に向かう。足取りは重い。爽やかな夜風に後ろ髪をひかれなが

らも、重苦しい空気が充満しているパーティー会場に足を踏み入れる。

意を決して顔を上げた瞬間――悲鳴が聞こえた。

陛下が使う出入口のあたりに、人々が群らがり、ざわめいている。

「何か……」

私も慌てて駆け寄る。するとそこには、床に倒れた国王陛下と、その横で声を張り上げるお父様の姿があった。

「術師を！ すぐに治癒術師を呼べ！」

お父様の叫び声が耳を貫く。治癒術師は、治癒魔法を使い体を癒す者だ。

お父様の叫び声は、聞いたことがないほど鬼気迫っている。次第に周囲のざわめきも大きくなっていく。

お父様の様子に不安を掻き立てられる。さらに陛下の顔を見て、その不安は膨れ上がった。

陛下の顔は蒼白で、体はぐったりとしており、胸も上下していない。明らかに息をしておらず、

陛下の命は風前の灯だ。

「陛下！ 陛下あ！ おい！ 術師はまだか！ このままでは陛下がっ」

お父様は必死に陛下の体を揺すっている。だが、お父様に抱きかかえられた陛下の腕はだらりと垂れ下がり、揺さぶられるがままに揺れている。

見る者すべてが棒立ちになり、動けない。治癒術師もまだ来ない。事は一刻を争っていた。

そんな中、お父様が近くの杯を手に取り、陛下の口に水を入れようとする。具合の悪い者には

水を飲ませるのがよいと考えたのだろう。

けれど、意識のない者にそんなことをしても意味はない。意味はないのだ――

『まずは呼吸と心拍をどうにかしないと！　すぐに心肺蘇生を！』

「いっ――」

訳のわからない声が頭に響いた。同時に頭を金づちで殴られたような衝撃に襲われる。

『ほら！　すぐに心臓マッサージをして！　心マよ、早く！』

何よ、この声！　訳のわからないことを言って！

声が頭に響くたびに、痛みが全身を貫く。

やめて！　やめてよっ！

『助かる人を死なせるの!?　私がやらなくて誰がやるのよ！　早くやるのよ！　陛下を見殺しにしているの!?　いい訳ないでしょ!!』

全身を痛み^{さいな}に苛まれ、聞き慣れない声も陛下のことも考えられなくなっていた。視界はぼやけ、やがて白く染まっていく。

同時に、痛み^{いたみ}の奥底から何かが膨れ上がっていき、押し潰されそうになった。

自分を守ろうと自らの体をぎゅっと抱きしめる。

次の瞬間、その何かが弾けて全身に広がった。

――そうしてようやく、私は苦しみから解放された。

目を開ける。

痛みを感じていた時間はとてつもなく長く感じた。けれど、目の前の光景は何一つ変わっていない。

蒼白な顔の陛下と、慌てふためくお父様。棒立ちになっっている貴族院の面々や、護衛達。

それらを見て、急に苛立ち^{いらだ}が湧いてくる。なぜなら、私には、何をすべきかわかるから。

そう……前世の記憶を取り戻した、今の私には。

何、ぼーっと突っ立ってんのよ！　早く処置しないと、陛下が死んじゃうじゃない！

普段ならば理性で抑え込む苛立ち^{いらだ}が、感情の前面に躍り出る。私は、取り戻した記憶を頼りに動き出した。

淑女としての体裁を気にする余裕はない。

今は、目の前の命に向き合わなければ。そう思い、私はすぐさま床を蹴った。

「お父様、どいてくださいませー！」

「なっ、何をする!?　貴様は――っと、レティシア!?　いきなり何を！」

陛下を抱きかかえているお父様の肩を強く掴んだ。すると、必死の形相で振り返ったお父様と目が合った。

今は説明してる時間なんてない。

私は、まくしたてるように言う。

「陛下を床に寝かせてくださいー！」

「いきなりなんだ？　いくらお前でも陛下の一大事――」

「体を揺さぶるほうが陛下にとって負担です！ とにかく今は、床に寝かせてくださいませ。急いで、お父様」

自分でも驚くほど冷たい声が出た。

じっと見つめていると、お父様はぐくりと唾を呑み込んだ。そして小さく頷^{うなず}き、私の指示に従ってくれる。

「倒れてから、どれくらい経ちましたか？ 一分ほどですか？」

「あ、ああ。まあ、それくらいだろう」

お父様の返事を聞きながら、私は陛下を診^みる。

「えっと……呼吸なし、脈は、頸動脈^{けいどうみゃく}は……だめ、触^ふれない。すぐに心臓マッサージをはじめます！ お父様！ 人払いと清潔な布をお願いします！」

「そ、そんな物で、何を……」

「いいから！ 早く！ 陛下を見殺しにしたいのですか!? お父様、私は陛下を救う方法を知っています！ やらせてください!!」

「くっ——わかった。その者！ 清潔な布を持ってこい！ 他の者達はすぐここから出るのだ！ 早く！ 急ぐのだ！」

お父様は近くの侍女達に指示を出す。宰相であるお父様の声が会場に響くと、貴族院の面々はすぐさま外へ向かっていく。とはいえ、護衛の人達は近くにいます。私が横たわる陛下の上に跨^{またが}ろうとすると、護衛が慌てて近づいてきた。

「宰相閣下のご令嬢とお見受けしますが、陛下に何をするおつもりか!？」

「邪魔をしないで!!」

「しかし！」

「今こうしている間にも、陛下の命は失われつつあるのです！ 私に何もさせたくないのなら、あなたが陛下の息を取り戻しなさい！ それができないのなら、大人しくしていて！ 今、私の邪魔をして陛下の命を救えなかったら、あなたに責任が取れるのですか!？」

私の言葉に、押し黙る護衛達。そこでお父様が助け船を出してくれた。

「すべての責任は私が取るう。だから、レティシアのやることを邪魔しないでくれなにか」

「宰相閣下がそうおっしゃるなら……」

護衛達はゆっくりと引き下がる。

ああ、今のでどれくらいの時間を失ったのか。

それを考えると焦ってしまう。しかし、一つずつ、確実にやるしかない。

私は、陛下に向き直った。

やはり、息をしていない。

私は陛下の胸に手を置いた。——胸骨の先、剣状突起^{けんじょうとつぎ}から指二本分上。そこが圧迫すべき箇所である。

私は体重をかけて、強く速く、そこを押した。

その時、お父様の右手が私に伸びてくる。だが、途中で止まった。私と目が合ったからだ。

おそらく、お父様は私を止めたかったのだろう。知識がない人からしたら、私がやっていることは陛下を傷つけているように見える。意識がない人間の体を圧迫しているのだから。

けれど、今止められては陛下を救えない。助かる可能性がある命を手放したくない。

私は心臓マッサージをしながらお父様と視線を交わす。

しばらくして、お父様は無言で静かに手を下ろすと、歯を食いしばった。どうやら見守ることにしてくれたようだ。

うん、ありがとう、お父様。あとは、陛下を救うだけ――

心の中で呟きながら、私はひたすら陛下の胸を押し続けた。そのたびに、陛下の体が揺れ、口からはお父様が先ほど飲ませた水が噴き出す。顔色はまだ悪かった。

「陛下、戻ってきてくださいませ！ 生きてくださいませ！ 陛下はまだこんなところで死んでいい人じゃない！」

そうこうしているうちに、人払いが終わったらしい。残っているのは、陛下と宰相であるお父様と私と護衛達。そして侍女や召使い達だった。

それを確認した私は、清潔な布を持ってきてくれた侍女を呼ぶ。

布越しだから、ノーカウントよね？

そんな悠長なことを考えながら、侍女に頼んで、軽く口を開けた時くらいの大きさの穴を布の中央にあけてもらう。

準備が整うと、私は陛下の顔に布をかけた。陛下の口と布の穴の位置を合わせる。そして、布越

しに唇を重ね、一気に息を吹き込んだ。

「んなああ!？」

馬鹿みたいな声を上げるお父様。しかしそれには構わず、私は唇を離すと、再び陛下の胸を押した。お父様はもう何も言えないのか、私は止められることなく心肺蘇生を続ける。

心臓マッサージ三十回に、人工呼吸を二回。それを続けているうちに、私は汗だくになっていく。噴き出る汗が、陛下の青白い顔に滴り落ちる。

そろそろ、私の体力も限界に近い。そう感じつつ、祈るように陛下の口に息を吹き込む。

――すると、陛下は唐突にむせて咳きこんだ。目もうつすら開いている。

心肺蘇生、無事に成功だ。

次の瞬間、私は床に座り込んでしまった。息は荒く、胸の鼓動が頭に響いてうるさい。

まだ予断は許さないけど、今、私ができることを成し遂げたのだ。

言いようのない充足感に、全身の力が抜けていくのがわかった。

そのうちに、後ろから数人が駆け寄ってくる足音が聞こえる。振り向くと、そこにはローブをまとった男達が立っていた。おそらく治療術師だろう。

その場を彼らに明け渡すと、途端に睡魔に襲われた。

私はそのままパタリと後ろに倒れてしまう。頭痛はまだ続いているし、あれだけ心臓マッサージをしたのだ。疲れて当然である。

あー、疲れた。ビール飲みたい。

ん？ ビールってなんだっけ？ そう思いつつ、私は意識を手放したのだった。
ぐう。

第一章 目を覚ましたその後

目を覚ますと、見慣れた天井が布越しに目に入った。

光が透ける繊細な刺繍付きの天蓋。私にかけられた柔らかな肌掛け。

どうやら私は、自室のベッドで横になっているらしい。寝返りを打ち、どこまでも沈んでいきそうなほどに柔らかいベッドに顔を押しつけた。

ああ、腕がだるい。両腕が痛む。

なぜだろうと考えて、陛下に心臓マッサージなるものをやりまくったことを思い出した。

——うん。やっぱり間違いないみたい。

自分自身の感覚だけが頼りだけど、あの時感じたそれは、今も体の中に残っている。

自分でも信じられないくらいだ。陛下が倒れた時に弾けた何かが、前世の記憶だったなんて。

あの瞬間に押し寄せたのは、誰かの記憶。——レティシア・シャリエール以外の、人生の記憶だった。

名前は思い出せない。けれど、『私はかつてこうやって生きていた』と、記憶を取り戻した瞬間に確信した。これは前世の記憶に違いないと。

前世の私は大学病院で看護師として働いていた。その記憶のおかげで、心肺停止に陥った国王陛

下に心臓マッサージと人工呼吸を施すことができたのだ。

ベストなタイミングで記憶が戻ってありがたかったが、自分でもまだ信じがたく、落ちつかない。なぜなら、前世の記憶が戻ったとはいえ、私がレティシア・シャリエールであることに変わりないから。

十八年間生きてきた今世の自分に、前世の記憶と経験が上積みされたようなこの感覚は、一言では表現しにくい。

そんなことをぼんやり考えていると、遠慮がちなノックが耳に届く。

「お嬢様。起きておいでですか？」

私付きの侍女——シュザンヌ・グノーの声だ。私は短く返事をする。

「ええ」

「では失礼いたします」

そつとドアを開けたシュザンヌは、私の顔を見るや否や、笑み崩れた。

シュザンヌはとても可愛らしい女性だ。付き合いは十年近くになり、他の侍女たちと比べると、いくらか気安い関係だと思っている。私より七歳も年上なのに、彼女の見た目の年齢は私とほとんど変わらない。薄茶色の髪を後ろで束ねた彼女は、ほほ笑んだまま中に入ってくる。

「おはようございます、お嬢様。ご気分はどうですか？」

「おはよう、シュザンヌ。そうね、大分いいわ。昨日はみんなに随分迷惑をかけちゃったわね」

「そうですよ。運ばれてきたお嬢様を見て、みんな慌てていました。しかも、全然目を覚まさない

んですから。あんまり心配かけないでくださいませ」

「悪かったとは思ってるわ。それで、教えてほしいことがあるんだけど——」

「陛下はご無事です。ご安心を」

シュザンヌは、さつそく私の身支度をはじめつつ、一瞬こちらに視線を向けると疑問に答えてくれる。それを聞いた瞬間、私はようやく緊張がほぐれた。

「はああ。よかったあ。陛下を助けられなかったら、どうしようかと思ってたのよ」

「駆けつけた治療師の方々がご尽力されたとか」

「お父様も一安心ね」

気分がよくなった私は窓の外を見る。

今日は天気がとてもいいようだ。私の心も晴れやかである。

「いきなりですが、いつもと変わらずお嬢様の髪はとても美しいですね」

私の髪を結いながら、なぜか褒めてくれるシュザンヌ。突然の言葉に、顔が熱くなる。

「と、突然何よ。褒めたって、何も出ないわよ？」

「何も期待しておりません……。ああ、お嬢様の金髪が波のようにうねり、日の光を浴びてきらめいている。まるで金色の川の流れ。唯一無二のものでしょうか」

「だから何を——」

「エメラルドのような瞳も、白い肌も、細く引き締まった肢体も、どれもが公爵令嬢にふさわしく美しい。常と変わらないのご様子です。まさしく淑女の鑑と言われるのも頷けますね」

シュザンヌの誉め言葉に、私は思わず口ごもる。シュザンヌは普段、それほど私を褒めない。一体、どうしたのだろうか。

「……それにもかかわらず」

「なに？」

「私の知らないうちに、お嬢様の内面は変化なさったんですね。お嬢様は、どこで医学をお学びに？ 治療師ちゆの方かたも驚いていましたよ。あの状態から陛下が息を吹き返すなど奇跡だ、と」

私のドレスを準備しながらシュザンヌはさりげなく聞いてくる。

胸がドキッと騒ぐ。まさか、『前世の記憶を思い出しまして』とは言えない。私は咄嗟とつさに誤魔化してしまう。それが悪手と知っていないながら。

「え、えっと？ たまたま？ そう、たまたまよ！ 以前、何かの本で読んだことをやってみただけよ。別に珍しいことじゃないわ」

「そうなんですネ。ご主人様も、治療師ちゆの方かたも誰も知らなかった対処法を、お嬢様は本で読まれたと。もしよろしければ、その本を教えてくださいでもいいですか？ 私も後学のために学んでおきたいと思います」

「その、あの、その本は貴族院で見ただもので、どんな物が覚えていなくて……」

「そうですか。でしたら、貴族院の司書に聞けばわかりますね。問い合わせてみます。シャリエール公爵家の名を使えば、すぐに調べてくれることでしょう。お嬢様の博識に感嘆する思いです。そ

れと、先ほどからうかがいたかったのですが……」

「ななな、なに？」

「その医学知識と、すこしばかり砕けた口調は、何か関係があつたりするのでしょうか？」

まったくこの侍女は……!!

私は心の中で叫んだ。シュザンヌは昔からこうだ。私の変化をすこしも見逃みのがさない。

十年前に初めて会ったころから、彼女は優秀だった。侍女に求められる基本的な能力を備えているのは当然のこと、些細ささいな感情の揺らぎや心の変化を察するのが得意だったのだ。

小さいころから、嘘やごまかしはシュザンヌにすぐにばれてしまい、その度に怒られてきた。当然今回の件も隠しきれはるはずがない。

彼女は、私が何かを隠し、結果、手助けできないことが嫌なのだという。

そう言われると、私も何も言えなくなってしまう。

だけど、このじりじりと追いつめるような言葉責め！ 心臓に悪いから、これだけはやめてほしい！

もちろん、シュザンヌに嘘をついていることは申し訳なく思う。でも、しょうがないじゃない！ 前世の記憶が戻ったなんて、言えない。信じてもらえる訳がないから。

かつての私は、看護師だった。医師や同僚と仕事をしながら、時に笑い合い、時にぶつかり合いつつ患者に向き合う日々を送っていた。

そして私生活は——とてもじゃないが、上品とは言えない生活だった。

具体的に言う……夜勤明けに昼間から飲みにいったり。そのまま夜まで飲み屋に居座ったり。かと思えば、友達の誕生日やイベントの時にはホテルビュッフェでスイーツを死ぬほどお腹に詰め込んだり。彼氏に振られた時は、デパ地下でたくさん買い物をしてやけ食いしたりもしていた。それはもう普通の……うん、普通の女子だったのだ。

その時使っていた言葉遣いは、砕けたものが多い。外面を取り繕うことは、今世で学んできた礼儀作法を駆使すれば可能だろう。しかし、こうして気心の知れた侍女の前では、咄嗟に自分を偽れなかったようだ。

あと……、もうすこし言うとか、やっぱりつらい。

前世の記憶を取り戻し、私の心は後悔と悲しみと恐怖でいっぱいだった。

かつての私は幼少のころ、病気にかかっていた。一時は命が危ういと言われたこともあったが、お医者様方のおかげで、無事完治。それがきっかけで、看護師になったのだ。

けれど、治ったはずの病は大人になって再発した。

徐々に役職がついてくる中堅看護師。仕事への自信がつき、やりがいを感じる時期——私の記憶は、そんな三十代半ばで途切れていた。おそらくそこで、病気で命を落としたのだろう。

そのショックが拭えず、平静を保てなくなっているらしい。

私を気にかけてくれる侍女の思いを嬉しく思いつつ、この場をどう切り抜けようか思考を巡らせた。けれど、すぐに妙案は浮かばない。どうすればいいんだ？ どうすれば——

「……さま？ お嬢様？」

シュザンヌに声をかけられ、慌てて顔を上げる。

「え!? 何？」

「どうしたのですか？ 突然黙ってしまわれて。何度声をかけても聞こえていないようでしたわ。もしかして、まだご気分が悪いのですか？」

「いいえ、そうじゃ——って、そうなのよ！ まだ昨日のことですこし混乱してるみたいでね！ だから、きつと言葉遣いも乱れちゃったのかなあ、みたいな？」

「……みたいな？」

私を見るシュザンヌの目が冷たい。

私だっけわかってる！ この言葉遣いが淑女らしくないってことは。でも、出ちゃうものはどうしようもない。そう、どうしようもないことなのだ。

そうやって無理やり自分を正当化しつつ、なんとかこの場を切り抜けようと私は話題を変える。

「あら、そういうええ、食事の準備はできているかしら？ 昨日の夜は何も食べていないから、お腹がすいてしまった」

「え？ あ、はい。すでに準備は整っております。もう召し上がりますか？」

「お願い」

私の身支度は、いつのまにか整っている。すべてシュザンヌがやってくれたのだ。やっぱりシュザンヌはすごい。

食堂に行こうと部屋を出た私は、前を歩くシュザンヌの背中を見ながら、ほっと胸を撫で下ろ

した。

前世について話すのは、もうすこし待ってね。私もまだよくわかってないから。ごめんね、シュザンヌ。

信頼する侍女に心の中で謝罪をしながら、食堂を目指した。

そして、間もなく食堂というところで、シュザンヌが完璧なほほ笑みを浮かべて口を開いた。シュザンヌの背後に黒いオーラのようなものが見えるのは、気のせいだろうか。

「中でご主人様がお待ちです。昨日のことで、話したいことがあるそうですよ。やすやすと誤魔化されてくださるご主人様ではございませんので、覚悟された方がよろしいかと。それでは、ごゆっくりお過ごしください」

やっぱり気のせいじゃなかった。私の気分は再び沈んだのだった。

「失礼します」

食堂のドアをノックして開ける。目に飛び込んできたのは白いクロスのかかったテーブルと、その上に並べられた料理の数々だった。色とりどりの料理は、食欲をこれでもかと煽^{あほ}ってくる。

魅力的な料理の奥には、席に着くお父様の姿が見えた。

お父様は目の前の料理に手をつけず、何やら書類に目を通してしている。給仕はそれを見守りながら横に控えていた。

私が食堂に入ると、お父様はちらりとこちらを一瞥^{いちべつ}する。

「お待たせいたしました」

「いや、来たばかりだ。誰か、レティシアの食事を頼む」

お父様はそう言うと、給仕^{うなが}を促した。

お父様はこの国の宰相で、まだ四十歳になったばかりだ。この若さで宰相になったのは、お父様が初めてらしい。

先代の宰相——おじい様が体を壊して隠居されてから、お父様はあとを継ぐようにその役目を引き受けた。若さ故に批判^{ひはん}を受けることも多いみたいだけど、お父様はそれを撥^はね退^のけるほどの功績を上げ、立場を維持しているみたい。

私と同じ金髪をオールバックにし、露^{あら}わになっている額^{ひたい}には年相応のしわが刻まれている。そんなお父様の真剣な表情を見ながら、私は向かいの席に腰かけた。

間もなく給仕が配膳を終え、いつのまにか部屋にいるのは私とお父様だけになっていた。えっと、これって人払いされているってこと？

どんな話をされるのか……。想像するだけで気が重い。ああ、嫌だな。

「レティシア。よく眠れたか？ 昨日はパーティー会場で倒れてから起きなかったと聞いたが」

「はい。そのようですが、朝はすっきり目覚めることができました。体も大丈夫です」

「そうか。それで……。お前にいくつか聞きたいことがあってな。パメラとミシェルはもうすこししたら来ることになっている」

「はい」

パメラはお母様、ミシェルは弟の名だ。二人には聞かせたくない話ってことか。

「ディオオン殿下に婚約を破棄すると言い渡されたそうだな？」

「ええ」

「しかも、その原因はお前にあるという。どういことだ？」

うん。当然、この質問は来るよね。

なんと答えたものか……。そういえば、考えておかなかった。

私は、すこしばかり考え込み、お父様と視線を合わせながら答える。

「まったく弁解のしようがありませんわ。殿下のおっしゃることは事実です。嫉妬にかられた私は、アンナ様にこれでもかと嫌がらせをしてきたのです。それに嫌気がさしたのでしょう。殿下のお心は、私を受け入れるには狭すぎたようすわ」

「殿下もそうおっしゃっていた。貴族院のパーティー中に陛下のもとに来てな。ひどく怒っていたぞ」

「それならば私に確認する必要はないでしょう。殿下は、嘘をつけるお方ではありませんから」

「……うむ」

とりあえずは事実確認、というところだろうか。

「それで？ お話は以上ですか？」

「いや。お前がどういうつもりであんなことをしたのか、私にはわからなかったのだよ。だってそうだろう？ お前とディオオン殿下の婚約は、ずっと前から決まっていた。いずれ殿下に嫁ぐことに

なるのだから、王太子妃——将来的には王妃になるつもりで努力してきたはずだ。それを、嫉妬にかられて棒に振るなど、今までのお前からは信じられない」

「あら、嫌だ。女の嫉妬はとても恐ろしいのですよ？」

私がそう言っただけで笑むと、お父様は顔を苦々しくゆがめる。

本当は別の理由があるが、そんなことお父様には言えない。言える訳がない。

これで誤魔化されてくれるといいのだけれど……

私が完璧な笑顔をキープしていると、お父様は根負けしたらしい。

「うむ……まあ、いい。この件は以上だ。間違いないならその上でいろいろと考えるしかないな。王家との婚約が破談になった原因が、我がシャリエール家にあるということは、非常にまずい。レティシアは、事の重大さをしっかりと認識しなさい」

「はい、お父様」

お父様には悪いことをしちゃったけど、これで傾くほどシャリエール公爵家は脆弱ではない。宰相であるお父様のおかげで、このアレンフルールでは強い影響力を持っている。

私自身が、国に関わることはもう無理だろうけど、私さえ処分すれば、きっと問題ない。

「レティシア、聞きたいことはまだある。昨日の陛下のことについて、詳しく聞かせてもらおうか」

「はい」

「単刀直入に聞くぞ？ 昨日のあれはなんだ」

突然、お父様の怒気が増す。私は訳がわからなくて、首を傾げた。

どうしてお父様が怒るのだろう。怒るポイント、どこかにあったかな？ 陛下の命が助かったんだからいいじゃないか。

私が首を傾げていると、お父様は低い声で言葉をつなげた。

「陛下になんだ、その、突然だな……あれだ、せ、せせせ、接吻^{せつぶん}などして！ 陛下にあのようなことをして、一体なんのつもりだったんだ！」

実の娘に言うのは、すこしばかり憚^{はばか}られる内容なのだろうか。お父様は、顔を赤くしながら顔をそらしている。なんだか可愛い。接吻^{せつぶん}って言うくらいで照れるとか、いくつだよ、お父様。

「ああ、あれですね。あれは、救命措置の一環で、人工呼吸というものです。息が止まっていた陛下に無理やり息を吹き込み、肺に必要な空気を入れました。陛下の命をおつなぎするために必要だったのですよ」

「接吻^{せつぶん}がか!？」

だから、人工呼吸だって言っているのに。私はムツとして眉をひそめた。

「キスなどではありませんよ。そんないやらしいこと、娘に向かって言うものではありません」

「い、いやらしいだ?!」

「陛下が倒れたあの時、すでに息をしておらず、心臓も止まっておりました。ですから、私は体の外から陛下の心臓を動かし、空気を吹き込んだのでございます。そうしなければ、陛下の命はなかったでしょう。もちろん、ああいったことをするには人目があるといけません。ですから、人

いをお願いしたのです」

「う、ん？ そうなのか。まあ、話を聞くと納得できるが……。しかし、未婚のお前が陛下に接吻^{せつぶん}をするなど——」

「キスではありません。人工呼吸です。しかも布越しですよ？ そんな風に考えないでくださいませ！」

「ぬう」

お父様は眉間のしわを深くする。だが、しばらくすると、ようやく受け入れたのだろう。大きくため息をつきながら表情を緩めた。

「まあ、治療^{ちりょう}師も、陛下は本来ならば亡くなっているとおかしくないと断言^{だんげん}していたからな。お前の言うことは間違いじゃないのだろう。そうなると、陛下はお前に救われたのだな？」

「いえ。治療^{ちりょう}師の方が尽力された結果でしょう」

「謙遜^{けんそん}する必要はない。助かった、レティシア」

「はい」

ようやく小さな笑みを浮かべたお父様に、私も笑顔で応じる。

緊張が解けたのか、お父様はようやくカトラリーを手に取り、ゆつくりと食事をはじめた。その様^{さま}は、まさに貴族といった感じ。

私ももちろん教育を受けているため、完璧な作法を身につけている。だが、なぜだか自分の動作にとっても違和感を覚えた。まるで、自分じゃない何かが動いているみたい。

その違和感を振り払おうと食事に集中していると、お父様は考え込むように首を傾^{かし}げていた。そして、思わずといったように疑問を漏^もらす。

「だが……なぜレティシアは陛下を助ける術^{すべ}を知っていたのだ？ 治癒術^{ちゆ}の使えないお前がなぜ、それほどの知識を」

その言葉に私の手は止まる。

予想していた質問だったけれど、模範解答など用意していない。さきほどのシュザンヌとのやりとりと同様、ただ誤魔化^{ごまか}すことしかできない。

「えっと……なんていうか。——そうっ！ 倒れている陛下を見てたら、咄嗟^{とつさ}に思いついたんです！ 偶然です！ たまたまです！ 単なる思いつきです！」

「ふむ。思いつきで陛下にあのようなことをしたというのか？」

お父様の眉間にしわが寄る。っていうか、怖いから！ なんて言えば納得するのよ、もう！

「いえ、そういうわけではなくて、急に声が聞こえて——って、あら？ そんなことより、お食事が冷めてしまいますわね。早く食べなくては、料理人達に申し訳ないわ、ねえ？ お父様。ほほ」

私は、とにかく話を逸^そらすことにした。

「いや、そんなことより——」

「まあ！ 今日のサラダは特別においしいわ！ 普段通りの味と野菜がたまらなく素敵！ お父様もそう思わないかしら？ ほらほら、時間も無限にあるわけではないのですから。さあさあ、急い

で食べてしましましょう」

とにかく勢いで押し切ろうと躍^{やっ}起^きになった。なんだかとうちんかんことを言った気がするが、構^{かま}っている場合じゃない。

当然、お父様は怪訝^{けげん}な表情を浮かべていたが、しばらくすると小さくため息をついて、食事を食べはじめた。

ふう。これで追及^{まぬか}は免れたかな？ ようやく私も料理を味わうことができる。うん、今日も本当においしいわ！

「しかし声が聞こえただと……？ まさか神から神託でも受け賜^{たま}ったのか……」

お父様は、食事の手を止め、ぶつぶつと何かを呟^{つぶ}いている。もしかして、ご飯いらないの？ いないなら、もらっていないかな？

「それとも、あの神のような所業……レティシア自身が女神の生まれ変わりなのかもしれない……」
いいよね？ その厚切りベーコン、もったいないから私が食べてあげる。

私がベーコンをかすめ取ろうとした瞬間、お父様はすつとそれを食べてしまう。

私が愕然^{がくぜん}としていると、まだ話は終わっていないとばかりに口を開いた。

「まあ、陛下の件は助かったのだからいいとして……陛下の件に関しては、このままという訳にもいくまい。謹慎^{きん}処分を言い渡す」

その強い言葉に、私は固まる。しかしお父様は優しい表情を浮かべていた。

「殿下に失礼を働いたお前を処分しない訳にはいかない。お前のした行^{おこな}いは恥^はずすべきことだが……

何か考えがあったのだろうか？ それに、お前は陛下を救ったのだ。不敬罪に問われはしまい。しかし、この王都では過ぎづらいだろう。よかったら本宅のほうでしばらく体を休めたらどうだ？ その間に、事実確認を含めてこちらでうまくやっておく。悪い話ではないだろう？」

お父様が私のことをわかっていてくれたことに驚く。そしてその氣遣いに、感謝の気持ちでいっぱいになった。

「本宅へ？」

「ああ。私は王都を離れられないが、お前は貴族院を卒業したのだ。卒業後に結婚する話は白紙に戻ったのだから、羽を伸ばしてもいいだろう。お前が望めばすぐに手配するが……どうする？」

本宅。それは、シャリエール家の領地にある我が家のことだ。幼少のころはそちらで生活していたけど、貴族院に通うにあたって、王都にある別邸に居を移した。こちらに来て二年も経ったが、やはり生まれ育った本宅のほうが馴染みは深い。

加えて、王都にいれば嫌でも他の貴族と関わらなければならない。淑女として、そして公爵令嬢として、お茶会などの社交に誘われたら、行かない訳にはいくまい。

殿下に婚約破棄を言い渡された私への風当たりが強いのは間違いない。噂話が届かないほど遠い地にある本宅は、今の私には天国のようなものだ。

それに、本宅なら人目を気にしないで、ゆっくりできるんじゃないだろうか？

私は生まれてからずっと、王妃になるための教育を受け続けてきた。幼いころから勉強で部屋に缶詰にされ、貴族院に行っていた間は、勉強と魔法の実技の予習で忙しかった。

前世では、忙しい仕事の合間に旅行に行ったり、働いた後にビールを楽しんだりしたけど、やっぱり長期間のんびりすることなんてなかった。

もしかして、これからの私の生活って、本当に天国だったりする!? 前世からの夢だった、ぐーたら生活が実現しちゃうのか!?

それならば断る理由などない！

すべては導かれるままに。多忙だった前世の分も、今世の分も、やりたい放題したっていいじゃないか！ レッツ！ ぐーたらあ！

思わず、飛び上がりそうになる体を理性で抑え、それこそ淑女らしい上品な仕草で礼をした。

「お父様。お心遣い、ありがとうございます。確かにそのほうが、私もゆっくり休めるかと思えます。お願いしてもよろしいですか？」

「ああ、良かった」

そう言って優しくほほ笑むお父様が、私には神に見えた。

こうして私は、天国への切符を手に入れたのだった。

第二章 来訪者の思惑

シャリエール公爵家の領地。

そこは、王都から馬車で二日と、比較的近い位置にある内地だ。農耕地が大半を占める広い領地である。

本宅は、領地で一番大きな街からすこしだけ離れた地に立つ。喧騒から離れた静かな環境は、確かに療養にふさわしい。

本宅に着いた私を迎えてくれたのは、執事であるドニと、召使い達だ。

今まで私達家族が生活していたのは王都にある別邸。

今もお母様と弟は別邸に住んでいる。

つまり、本宅にいる公爵家の血縁は私だけということだ。それが何を意味するかというと、私が本宅のヒエラルキーのトップ。最高権力者なのだ！

「シュザンヌ。ワインのおかわり持ってきてー」

本宅にやってきて早一週間。テラスでデッキチェアに座り日向ぼっこをしていた私は、昼間からワインをあおっていた。

いや、だってね。おいしいんだよ、この家にあるワイン。こんなの前世でも飲んだことない。それが、言うだけですつと出されるんだから、飲まない理由がない！

けれど、侍女のシュザンヌは私を咎める。

「お嬢様。もういい加減にされたらどうですか？ こちらに来てからというもの、来る日も来る日も食っちゃ寝ばかりして。昼間からお酒を飲むなど、淑女の風上にもおけません」

「いいのよ。だって、私はもう王太子妃にならないし、勉強する理由もないわよね。小さいころからずっと頑張ってきたんだから、自分にご褒美をあげてもいいと思わない？」

「すこしくらいなら構いませんが……もう本宅に来てから一週間もこの状態ではないですか。ドニも含め、今のお嬢様の姿を見て、みんな嘆いておりますよ」

「ま、まあ、そうね。そういえば、そうかしら？」

会話を交わしながら差し出されたのは、水だった。

きつと、シュザンヌからの『いい加減にしろよ、この野郎』というメッセーじだ。まあ、確かに、客観的に見るとどうかと思う部分もある。心配してくれてありがたいんだけど……

そんなことを思いながら、私はおとなしくその水を飲み干した。

今、私は十八歳。前世での記憶は大体三十数年間。今の自分の人生よりも長い経験と知識がいきなりのしかかってきたせいで、性格もそっちに引っぱられるのは、しょうがないことだろう。

生粋の貴族から一般庶民へと、価値観と思考が引きずられている違和感に、実は私自身も馴染めず苦しんでいるのだ。

でも、お酒に逃げるのがみつともないというのはごもつとも。このままではアルコール依存症まっしぐらだ。そうなれば、ぐーたら生活どころではない。とんでもない苦しみの中、酒絶ちをしなければならなくなってしまう。そんな未来は望んじやいない。

私は、小さく息を吐くと、自嘲するように苦笑いを浮かべる。

「あのね、みんなが心配してくれてるのは、わかっているよ。……けどやっぱり苦しかったんだよね。殿下に罵声（ばせい）を浴びせられるのも、周囲の人から冷たい視線を向けられるのも、さ」

「お嬢様……」

「でも、もう大丈夫。いい加減、なんか違うなって思ってたから。お水、ありがとう」

「はい」

私が感謝を伝えると、シュザンヌは優しくほほ笑んでくれた。

シュザンヌは厳しいところもあるが、結局、私のことを考えて行動してくれている。そのシュザンヌがいい加減にしろ、と言うのだ。だったら、大人しく聞いておこう。

確かに、引きこもってぐーたらしているのは、心も体も休まるし、楽しい。

けれど、看護師時代に感じていた、仕事後のお酒のおいしさには決して敵わない。今と前世で何が違うのだろうか。

その答えに行き着く前に、私はシュザンヌの言葉に身を凍らせることになった。

「気づいてもらえて本当によかったです。このままでは、お嬢様の服をすべて作り直さなければならなくなっていましたから」

「え？　なんで——」

「気づいておりました？　ドレスのお腹のあたりがパツパツになつているのを。お嬢様が着られる服は、もう数着しかありませんよ？　一週間の不摂生（ふせつせい）がもたらした恵みを、お腹回りに蓄（たくわ）えているのですね」

「嘘」

慌てて腰回りを掴むと、ぐにっとした何かがあった。

王都にいたころにはなかった存在に、さっと血の気が引いていく。

「シュザンヌ、まさか！」

突然立ち上がった私の腰から、びりっという、何かが破けた音がした。

「のおおおおおおおお！！！」

その叫びは、ダイエツトという戦闘の開始を告げるゴング。

私の戦いは、今、はじまろうとしていた。



さらに一週間後。食っちゃ寝生活で身についた脂肪を落とすべく、私は散歩に出かけていた。散歩といっても、自由気ままに歩ける訳ではない。シュザンヌと護衛を引き連れ、決められた道を歩くのだ。そんな些細（ささい）な運動でも、今の私には重要で、そうしなければ淑女（しゅくしよ）としての体裁を整え

るどころの話ではなくってしまふ。綺麗なドレスも、まさに豚に真珠だ。

その散歩の中で出会ったのが、領民達である。

みんな、私の姿を見ると頭を下げ、声をかけてくれる。その声はとても温かく、傷ついた私の心を癒してくれた。だが、気になることもある。

それは、孤児の多さだ。しかし、今の私にできることは何もない。無力さを噛みしめながらの散歩は、まさに身を削るほどつらかった。その感情を吞み込みつつ、散歩を続ける。

気分は、晴れるどころか、落ち込んでいくばかりだ。

沈んだ気持ちから目を逸らしながら、私は屋敷に戻った。すると、そこには一台の見慣れない馬車が停まっている。

私がシュザンヌを見ると、彼女は小さく首を傾げた。

「今日は来客の予定などなかったはずですが……」

「見たところ、馬車の中に人はいないわね。ドニが屋敷に入れたってこと？」

「何か、急用かもしれませんね」

二人で首を傾げながら玄関の扉を開けると、すばやくドニが近寄ってくる。そして、耳元でささやいた。

「お嬢様。王都からのお客様です」

「誰？ 突然の訪問など、不躰にもほどがあるでしょう。そんなことを言ってくる方を通すなんてドニらしくない」

「それが、その不躰がまかり通る立場の方で——」

「ようやく戻ってきたか。隠居した公爵令嬢は優雅でいいな」

屋敷の奥から聞こえた声に視線を向ける。そこには背の高い美形の男が立っていた。

細身だが、よく鍛え込んでいるのだろう。袖から見える腕はたくましい。すっと伸びた背筋から、育ちのよさがうかがえる。

男の濃い茶色の髪は首までの長さで、緩く波打っており、色気を感じさせる。髪の毛と同じ色の瞳に見つめられ、私は弾丸に撃ち抜かれたような感覚を覚えた。

「あなたは——」

その立ち姿には見覚えがあった。すぐに彼の名前が思い浮かぶも、なぜ彼がこの場にいるのか、まったくわからない。

「——クロード殿下」

私の元婚約者である第一王子の弟——第二王子のクロード・アレンファールだった。

にやにやと笑みを浮かべているクロード殿下に背を向けて、私はドニを見る。彼は小さく首を横に振ると、うやうやしく頭を下げた。ドニはまだ殿下の突然の訪問の理由を聞いていないようだ。

「すぐにおもてなしの用意をいたしましょう。お嬢様。応接間にクロード殿下をご案内いたしますので、お召し物をお替えになったらいかがでしょうか？」

困惑しているだろうに、ドニは私にとって最善の提案をしてくれる。

この家にいる公爵家の血縁者は私だけ。私が落ち着いて対応しなければならぬ。王家への不敬

は家全体に影響がある。トラブルにならないよう立ち回るのが、今の私の使命だ。

「ええ。では、クロード殿下。大変恐縮なのですが、今しばらく応接間でお待ちくださいませ」

殿下にそう伝えると、私は急ぎ足で自室へ向かった。そして素早く着替え、身支度を整える。

その間にいろいろ考えたけど、やっぱり状況がわからない。とりあえず、クロード殿下と話さなければならぬが、気が進まない。それは、クロード殿下について、いい噂がないからだ。

第二王子、クロード・アレンフラル。

その美貌で、十七歳という若さながら多くの女性を虜にしているらしい。ディオソ殿下が爽やか潔癖王子だとしたら、クロード殿下は色気たっぷりな悪い王子だろうか。貴族院では、常に美しい女性を侍らせていた。ちなみに、私は声をかけられたことはない。

女性関係はもちろんのこと、それ以外でも素行がよいとは言えず、喧嘩や夜遊び、その他もろもろの噂は後を絶たない。そんなクロード殿下が今、このタイミングでここを訪れるということは、何か企んでいるのだろう。

私はできるだけ心を落ち着かせて応接間に向かう。

応接間の扉を開けると、クロード殿下は足を組んでソファに座りながら、お茶を飲んでいた。そして、彼の後ろに、背の高い騎士が立っている。

「お待ちせしてしまい、大変失礼いたしました。改めまして、レティシア・シャリエールと申します。この度は――」

「堅苦しい挨拶はいらない。まあ、名乗ってくれたんだ。俺も同じように名乗るとしようか……俺

はクロード・アレンフラル。立場的には、この国の第二王子となっている」

「存じております、殿下」

私の挨拶を遮ったのに悪びれもしない殿下。噂と違わぬ様子に、私は思わず顔を引きつらせる。

「一応、聞いておきたいのですが、そちらの方は……」

「俺の護衛だ。気にするな」

私と目も合わさずに言い放つ殿下の態度にイラッとしながら、彼の向かいの席に座った。私の後ろにはシュザンヌとドニが立つ。小さいころから一緒にいる二人のおかげで、背筋を伸ばすことができた。私は一呼吸置くと、口を開く。

「本日は、わざわざおいでくださいまして、ありがとうございます。まさか、我が領地にクロード殿下がお越しくださるとは、思ってもみませんでした」

「パトリスの領地だからと期待していたが、所詮は田舎だな。面白くもなんともない」

パトリスとはお父様の名前だ。うちの領地は殿下の期待外れだったらしい。

「あら。それは大変失礼いたしました。せっかくですので、我が領地の特産などお召し上がりになつてはいかがですか？ 王都では珍しい物もあるかと思えます。ドニ、準備を――」

「いらん！」

大きな声で遮られ、私とドニは固まってしまった。

なんとということだ。うちの領地のお菓子や果物は、とてもおいしいのに！ 散歩から帰ってきたばかりで、私だって食べたいんだからね！

「そんな貴族然としたやりとりをしに来たんじゃない。お前に聞きたいことがあるんだ」

「まあ、光栄でございます。それで……どういったお話でしょうか？」

「決まってるだろ？ お前が兄貴との婚約を破棄した理由だ」

私はピクリと眉を動かしたが、大きく表情は変えない。

しかし、クロード殿下の言葉に、私の心臓は早鐘を打ち、背中にじわっと冷や汗が噴き出す。

「あの、どういうことでしょうか？ 私が婚約を破棄したのではなく、殿下が破棄されたのです。それもこれも、私自身の未熟な嫉妬が引き起こしたものだ。今では反省しておりますが、私がアンナ様に失礼なことをした結果でございます」

「しらばっくれるな。お前が嫉妬に狂うだと？ そんなことがあり得ないのは、父上もパトリスもわかっている。何より、お前の行動が物語っているんだよ。本気であの男爵令嬢に危害を加える気がないってことをな。クリストフ、あれを」

「は」

クロード殿下の後ろに控えていた騎士が、そつと書類を手渡した。殿下はそれに視線を落とし、ゆっくり読み上げていく。

「お前は、貴族院でアンナ嬢にいろいろやっただな？ アンナ嬢を罵ったり、授業に行けないようにしたり。他には、水をかける、持ち物を隠す、ドレスを切り裂く……ははっ！ なんだこれ。夕食のおかずを一品減らす、だ？ 地味すぎて嫌がらせかどうかともわからない」

私が犯した罪を目の前で読み上げられるなど、これ以上の恥辱はない。

そりゃあ、笑われても仕方ない内容ではあるだろう。けど、当時はそれで精一杯だったのだ。それ以上はできなかったのだから仕方ない。

「その事実が婚約破棄を招いたのでございます。恥ずべき失態です」

「確かにその行為自体は褒められたものじゃないが、お前はちゃんとフォローをしてるんだよな。律儀に、この夕食おかず事件にもよ。くくつ、やっぱりくだらない」

殿下の言葉に、私は思わず目を見開いた。

「一個ずつ挙げていったほうがいいか？ えっと、お前がアンナ嬢を罵った後は、決まって仲のいい友人や兄貴の野郎が現れていたそうさ。罵られた後にアンナ嬢が一人になることはなかった。授業を受けられなかった時は、親切な教師が現れて特別授業を開いた。水をかけられた後にはちょうどよく水の魔法操作に長けた生徒が通りかかり、ドレスを乾かしてくれた。持ち物を隠されてもそれが兄貴との仲を深めることにつながったり、ドレスを切り裂かれた後は、より一層美しいドレスを手に入れて夜会などで目立っていた。夕食のおかずは……まあ、これはいいか。アンナ嬢に何が起ころうとも、必ず誰かが彼女を助けている。こんなことってあり得るのか？」

「あの方の人徳でしょう。私にはなく、あの方にはあった。それだけでございます」

「あつそ。じゃあそのアフターケアをした全員が、同じ人物に指示されて行動しているって調べがついてたとしても？」

探るような視線。思考の奥まで見透かすようなその茶色い瞳は、ひどく透き通っていた。

私は、完璧だった——完璧だったはずなのに。

貴族院に入り、とある危険を予見した私は、ディオン殿下に婚約を破棄してもらえよう暗躍した。

殿下は失敗を許さない、ある意味潔癖なところがある。彼のことから、きつと些細な汚点であっても私を見限ると思っていたのだ。

だが、思ったよりも私はディオン殿下の信頼を得ていたらしい。彼に見限られるのは、なかなか難儀だった。

できることなら、アンナ様を傷つけたくなかった。けれど、そうしなければ失われる命がたくさんあったのだ。私は、心を鬼にして遂行するしかなかった。

もちろん、ただ傷つけてそれっきりではいたたまれない。

彼女の心が折れてしまわないよう配慮したのだが、バレないために最善を尽くしたつもりだった。けれど、クロード殿下はそれを見抜き、調べをすませているという。

誰も気づかなかったことに、彼は気づいた。

私は目の前の男に対する警戒心を最大限まで上げた。

「おほほ。戯れが過ぎますわ、殿下。私にそんな力はありません。嫉妬に狂った女の惨めな末路と、笑ってください」

「このままだと、おそらく父上とパトリスは、兄貴に婚約破棄の撤回をすすめるだろうな。いや、パトリスはまだしも、父上は間違いなく、だ」

「なっ——!? どうして!」

思いがけない言葉に立ち上がりそうになる。しかし、そっと肩に手を置いてくれたシュザンヌのおかげで助かった。寸前で腰を落ち着けると、すぐさま表情を引きしめて殿下を見る。

「それが国益になるからだ。この国の平和と王家を守るためには、兄貴じゃ足りない。レティシア嬢……お前の力が必ず必要になる」

「そんなことありませんっ。私の行いは王妃にはふさわしくありませんわ」

「ふさわしいかどうかの問題じゃない。それは、お前が一番よくわかっているはずだろ?」

どこか勝ち誇ったように、笑みを浮かべるクロード殿下。彼は組んでいた足を解いて、ぐいっと身乗り出した。

「それに、気づいているか? 過失で婚約を破棄されたはずのお前が、元の関係に戻ることを頑なに拒否している今の状況が、おかしいって」

そう思った時には遅かった。本当なら、私は喜ばなければならなかったのだ。陛下やお父様が元のさやに戻そうと考えてるなど思ってもみなかったから、動揺してしまった。完全に失敗だ。なんだ、この王子。何がしたいんだ?

疑問を抱きつつ、私はクロード殿下をじつと見つめた。

「最初は不思議だったんだ。あのシャリエール家の令嬢、淑女の鑑とまで言われるレティシア嬢が、陰湿ないじめを? まさかと思って貴族院で目撃証言を集めてみたら、本当にしてるんだもん。けど、そこで一番の謎が残る。それは、なぜお前が婚約を破棄させるように仕向けたのか」

「だから、ずっと言っているではありませんか。私の不徳の致すところだと」

すこしむっとしながら言う私に対して、殿下は食い気味に言葉を重ねてくる。

「面倒だから、もうその設定はやめてもよくないか？ いいから聞け。その謎はしばらくの間解けなかった。俺だって、王家と影響力の大きいシャリエール公爵家がつながることは、国にとっていいことだと思ってたからな。それを阻止するお前にどんな企みがあったのか。シャリエール家以外の公爵家について調べを進めると、おのずと答えにたどり着いた」

ああ、目の前の男はもう気づいているんだ。私の企みに。努力の結果がもたらしたものに。

「この国に、公爵家は四つある。仮に、シャリエール家以外の公爵家を、三公と呼ぶことにしようか。そう……三公は、お前らの婚姻に懸念を抱いていた。実質はともかく、表面上は同格として体裁を保ってきた公爵家のバランスが崩れることを、恐れたんだ。王家と婚姻でつながれば、シャリエール家は他の三公よりも政治的な影響力を持つことは間違いない。それは、三公にとつて我慢ならないことだったんだろう」

クロード殿下は、私が調べ、考えた通りに話を続ける。

これは誰にも言えないことだったのに。言ってしまったら、ディオオン殿下のみならず、お父様や陛下も否定することになるから。

「三公は、静かに準備を進めていた。婚姻を進めようとする父上とパトリスの隙を突いて、食料や、武器や、人材の準備を。すこしずつ、すこしずつ……それこそ数年単位で」

クロード殿下の話聞きながら、ぐっと唇を噛む。

だってしやうがなかったじゃない。私にだって、ディオオン殿下を支えていこうと思っていた時期はあった。彼に、もうすこし王としての資質が備わっていれば。そう思わなかった日はない。けれどディオオン殿下にそれを求めることは難しかった。だから、私が泥をかぶらなきゃならなかった。「今回の婚約破棄の裏にあったもの。それは、痴情のもつれでも、父上達の思惑でも、公爵令嬢の酔狂でもなんでもない。それは——内乱だ」

頭の中に心臓の音が木霊する。

鳴りやまない音が、私の不安をこれでもかと駆り立てる。膝の上で組んでいる手に爪が食い込んでいることに気づいて、私は慌てて力を抜いた。

前を見ると、クロード殿下がさも楽しそうにほほ笑んでいる。

遠目には、お茶会を開いているようにでも見えるだろう。しかし、ここはそんな楽しい場ではない。私がそつと進めてきた、人生をかけた大博打が失敗に終わろうとしている現場だ。

「……ほ、ほほ。ご冗談を。どの貴族の方も、王家を支えていきたいと、心から思っているはずです。内乱なんて物騒な言葉を口にするこすらありませんわ」

必死に言い繕う私に対し、クロード殿下はため息をつく。

「はあ、もう取り繕わなくてもいいんじゃないか？ 別に、俺は今回の件について何かするつもりはない。お前の思惑に気づいたことを、誰かに話そうとすら思ってもないんだから」

「は？」

思わず、間拔けな声が出た。

え？　じゃあ、クロード殿下は、一体何しに来たの？　まったくもって訳がわからず、私は大げさに首を傾^かげてしまった。

「公爵令嬢がそんな間抜け面^{づら}をさらすな。まあ、不思議に思うのも無理はないか。俺がここに来たのは、お前の計画には大きな穴があると指摘するためだ」

「大きな……穴ですか？」

「ああ。それは、俺にとって看過できる問題じゃない。だから、こんな田舎^{いなか}にこうして赴^{おもむ}いたし、直接お前と話すことにした。兄貴は計画のけの字にも気づいちゃいなかったからな」

「それは、そうでしょうけど……」

はあ。もうここまでばれてるなら、彼の言う通り、これ以上取り繕^{つくろ}ったところでしようがないだろう。っていうか田舎^{いなか}とか、一言多いし。

確かに私は、内乱を避けるために婚約破棄^{くわく}を企^{くわ}てた。クロード殿下の言うことは事実だ。

私が内乱の予兆に気づいたのは、あるお菓子がきつかけだった。

この国で好まれるのは、クッキーやケーキのような、子どもからお年寄りまでが食べやすい焼き菓子。だが、貴族院に入り、シャリエール公爵家以外の三公の領地を回った際、それらと異なるお菓子が量産されていることに気がついた。

三公の領地で量産されていたのは、硬くて食べづらい上に、甘くもない焼き菓子だ。

そんな菓子が流行^はるものだろうかと思議に思い、貴族院で三公にゆかりのある者達に聞いてみると、誰もが流行^はるはずがないと一笑した。『公爵様がお好きだけで、民^{たみ}が好んで食べること

はほとんどありません』と。

調べた結果、彼らの言葉通り、焼き菓子はそれぞれの公爵家が領内の菓子店に作らせている物であった。そして、それを買っているのも公爵家。

違和感を覚え、三公の商人との売買履歴を調べて——日持ちのする食料を他領から買いつけていることが発覚した。それも、あまり目立たない量を少しずつ、数年にわたって。

しかし、それらの食料が市井^{しせい}に売りに出されている様子はないし、他領に転売しているわけでもない。

三公が日持ちのする食料を溜め込む理由を考え、私は『もしや』と不安に駆られた。そして、彼らを徹底的に調べた。結局三公は、食料だけでなく、お金や人材、多くのものを集めていた。

まるで——戦いの準備を進めるかのよう。

最初は気のせいだと思ったけど、情報を集めれば集めるほど、ディオ^{ディオン}殿下と私が結婚した後悲劇が起きるという確信が増していった。

内乱を回避するには、私達が結婚しないことが一番だ。

もちろん、お父様にこのことを話すこともできた。

けれど、誰も何も気づいていない現状でこの爆弾を投下することは、私にはできなかった。それこそ、派閥争いに拍車をかけ、国が分裂する未来しか浮かばない。人知れず内乱の危険を消失させる——そう考えた時、私がコントロールできる中で一番現実的だったのが、婚約の解消^{うな}を促すというものだった。

うまくいったかと思っていたけど、大きな穴ってなんだろう……気になる。

「それで、私の計画に何か問題が？」

「ああ。それは、内乱を回避したあとの、国の行く先に決まってるだろう？　っていうか、お前はそれに気がつきながらも目をつぶったんだろうな。兄貴がお前以外の令嬢と結婚して国を仕切っていたら、遠くからず、国は衰退するだろう。この国に待っているのは、破滅と混沌だ」

その言葉に、私は口角を上げて答える。

「あら……それは、ディオオン殿下と他のご令嬢を見くびりすぎではないのですか？　もしかしたら、うまく国を繁栄させていけるかもしれないじゃないですか」

「それが難しいのはわかってるんだろ？」

ため息をつきながら頭を抱えるクロード殿下。彼の意見は、確かに共感できるものだった。

というのも、ディオオン殿下の優秀さは、とても歪なものだからだ。

ディオオン殿下は、頭は決して悪くない。それどころか、貴族院でも常にトップの成績を誇るほどの秀才である。加えて、清廉潔白をその身で体現するかのごとく、悪をよしとしない正義感を持っていた。

これだけを聞けば、王にふさわしいように思えるが、知性と正義感だけでは国は治められない。ディオオン殿下に決定的に不足しているのは、悪をも包みこむ器の広さと、それを可能にする柔軟性だ。

私も聞いた話なのだけど、小さいころの殿下は、それはもう厳しい教育を受けたらしい。

年齢以上に知識を吸収していく殿下に、周囲の者は期待したという。事実、本人もその期待にしっかりと応えたようだ。

やがてディオオン殿下は、自分は決して間違わないのだと過信するようになった。

他者の言葉を聞き入れず、独自の判断だけで動くようになったのだ。

ある時は、外交の場で些細な失敗をし、王家に恥をかかせた臣下を、その場で解雇した。

またある時は、城に仕える者が足しげく通っていた賭場で彼が破産に追い込まれたと知り、その賭場を問答無用で潰した。

王族に苦言を呈した者達を、すべて捕まえ拘束したこともあった。

殿下は狭い視野、偏った価値観で物事を見ているから、こうした判断を下す。しかし本来、小さな失敗は正せばよいのだ。

確かに臣下が王家に恥をかかせてはいけないし、人を破産に追い込む賭場など危険極まりない。

王族への苦言は、時と場合によっては不敬罪にあたるだろう。

とはいえ賭場の件に至っては、そもそも賭け事に現を抜かす者の責任もある。王家への苦言は陳情として受け取り、改善への道しるべとすべきだ。

陛下も幾度となく論じてこられたが、殿下には理解していただけなかったらしい。お父様が沈痛な表情でそう語っていた。

だからこそ、ディオオン殿下には彼を裏からサポートし、時にはその間違いを正せる婚約者が必要だった。

そして、私に白羽の矢が立ったのだという。確かに、私は身分もあるし、自分で言うのもなんだけど、能力的にもそれなりだ。殿下をサポートしていくには、うってつけな存在だったのだろう。けれど、そういった理由での婚約が国を破滅に導くなんて、それこそ大問題だ。クロード殿下の言う懸念はわかっていたが、内乱が起きた時の被害と天秤にかければ答えは一つ。私は、ニコリとほほ笑むと、わざとらしく肩をすくめた。

「あら？ 内乱を起こして国力を低下させ、他国に攻め入られるほうが、流れる血だって多いのではありませんか？」

「やっぱりわかっていやがったか。なら、なんで国の衰退を避けようとしらない」

私はハンと鼻を鳴らした。彼はどうしてわかりきったことを聞くのだろう。

「なぜって、それを考えるのは王の務めだからです。私はすでに無関係。そんなの、知ったっちゃありません」

「なんだ、いきなり口調まで砕けやがって」

「取り繕ってもしょうがないと言ったのはそちらでしょう？ この場での話は内密にしていただけという話ですし。もちろん、私の口調も水に流してくださるんですよね？ 殿下？」

「はっ。いい度胸してやがる。まあ、いい。それはそうと、関係ないっていうのは、どういうことだ？ 公爵令嬢の言うことじゃないだろう」

「たかだか公爵令嬢には、国の衰退を避けることはできませんから。それに私の企みなど、殿下にあつさり暴かれてしまうくらいポンコツですしね。とてもお役に立てません」

私の言葉を聞いて、クロード殿下は訝しげにこちらを見つめてくる。

何かを見通そうとするその瞳は、焦りとは別の理由で、私の心臓を跳ねさせた。

「それで？ そのことで私を糾弾しに来たのですか？」

「まさか。国の危機をいち早く察し、その危険を避けるために尽力してきたレティシア嬢に、そんなことをするつもりはまったくくない」

「では何を――」

「情報を集める力と、それらをつなぎ合わせて未来を導き出す頭脳。加えて、視野の広さと先見の明。ただの令嬢としておくには、惜しいと思つてな……」

言いたいことがはっきりしない言葉に、私は「はあ」とため息のような相槌を打つ。

すると、そんな私の前に、クロード殿下が突然跪いた。そして私の右手をそと取り、そのまゝ、潤んだ瞳で私を見つめてくる。

「アレンフラル国国王位継承権第二位。クロード・アレンフラルは、あなたを妻に娶りたくまいました。この国の憂いを絶つため、一緒にこの先の人生を歩んでいってくださいませんか？」唐突に紳士と化したクロード殿下は、熱を帯びた視線を送ってくる。

吸い込まれそうな彼の瞳に、私の顔は熱くなる。美しい男性に結婚を申し込まれるなど、生まれてこのかた、初めてだから。

クロード殿下はにこりとほほ笑み、私の手に向かってそとと顔を近づけてくる。まさかの展開に、私の頭はショート寸前だ。ドキドキと高鳴る胸に空いたほうの手を置き、ぎゅっと握りしめる。